

極めて偽物なり、作業者は香味の有無を以て分別す、をよそ真物にして其上品なる物は、舌上にありて、俄に濃き苦味をあらはす、彼苦甘口に入れて粘つかず、苦味浸潤に増り、口中分然として清潔た、苦味のみある物は偽物なり、苦甘の物を良とす、また羶臭香味の物は良らずといへども、是は肉に養はれし熊の性にして、必偽物とも定めがたく、其中初甘く後苦物は劣れり、又焦氣物焦きは良品なり、是試法教へて教べからず、必年來の練妙たりとも、真偽は辨じやすくして、美惡は辨じがたし、

制偽膽法

黄柏、山梔子、毛黄蓮の三味を極細末とし、山梔子を少し熬て其香を除き、三味合せて水を和して煎じ詰むれば、黒色光澤乾て真物のごとく、是を裏むに美濃紙二枚を合せ、水仙花の根の汁をひきて乾かせば、裹て物を洩らすことなく、包みて絞り、板に挟みて陰乾かひばとすれば、紙の縫又藥汁の潤入みて實の膽皮のごとし、尤冬月に製すれば、暑中に至て爛潤やすく、故に必夏日に製す、是は備後邊の製にして、他國も大抵かくのごとし、他方悉く知がたし、又俗説には、こねり柿といふ物味苦し、是を古傘の紙につ、むもありと云へり、或は眞の膽皮に偽物を納れし物もま、ありて、是大に人を惑はすの甚しき也、

〔西遊記 續編 二〕熊膽

肥後國球琳くまに遊びける頃、彼地の高き人病み給ふことのありて、余南〇橋に治療を求められけるに、熊膽を用ゆる藥なりければ、請求めて一具を拜領せり、其膽に紙札ありて、皆越村新兵衛と書付たり、いかなるものぞと聞くに、獵師熊を取りたる時は、其旨を案内するに、役人來りて見分して、其熊を解かしめ、其膽に取得たる獵師の名を書付て獻せしむる事也、故に少しも贗物の氣遣ひなきなり、余が得たる膽重さ纔に壹匁三分、加賀などより出る膽とは甚だ小し、此地の産は皆